

暮らしの鉢植え

01-1. [背景] 家の境界が溶けている社会

ネット社会の広がりやリモートワークの普及によって私たちの暮らしは、どこにいても同じような生活ができるようになった。同時にプライベートであったはずの家の境界は薄くなり、昔々の生活共同体が公共的なものへと変化している。



01-2. [背景] 暮らしの根付き方

暮らしの根付き方は家の建ち方と大きく関係している。現代の都市では暮らしの育つ土壌がない状態で、根付くためには新しい空間価値が必要だと考える。



02. [敷地] この街の暮らし 店舗・工場併用住宅

敷地となる大阪市玉造地域のある通りには、店舗・工場併用住宅があった。今は1階の多くが物置となり、住宅としてシャッターを閉じて暮らしの顔が見られず、住宅のタイプには2種類あり、暮らしは間口によって変化があることが読み取れた。



03. [調査] シャッターに隠れたスキマ

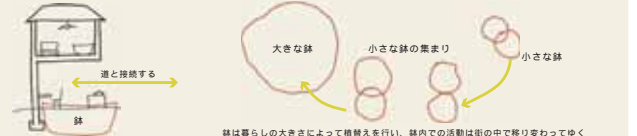
この街の道はトラックなどの車が多く、道幅も大きい人が立ち止まれるような居場所が少ない。そこで併用住宅のシャッター内の空間を街のスキマと捉え、奥行きのある調査を行った。赤の破線と塗りつぶされた空間がシャッター内の隠れたスキマである。このスキマが暮らしを育む拠点となるように設計を行う。

設計の敷地は黄色で囲んだ範囲とし、建築事務所、住宅、元文具店、元酒屋など様々な用途が入り交じる場所である。



04. [提案] 家のスキマを暮らしの鉢とする

暮らしを育てる土壌のない都市で、新しい暮らしを根付かせるために暮らしの「鉢」を住宅内に提案する。そしてこの街の特徴である併用住宅のシャッター空間を、家の一部で街と接続ができるような鉢へとコンバージョンを行うことで、この街にしかできない地域に根付きやすい空間を作り出す。

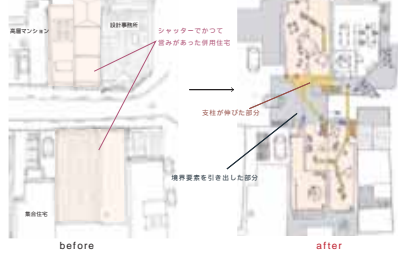


05. [手法] 街にあった単純な操作で鉢をつくる

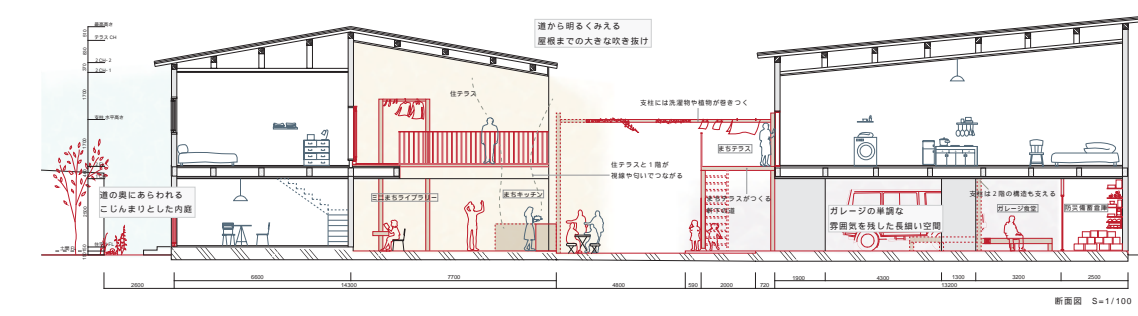


06. [配置] 鉢が道を跨ぐことでの街の変化

併用住宅の活用されていないシャッター空間を増築要素を引き出してテラスを伸ばすことで、住む家から暮らしに変化させる。暮らし家は住人だけでなく、街の人にとっても暮らしを育む鉢となる。

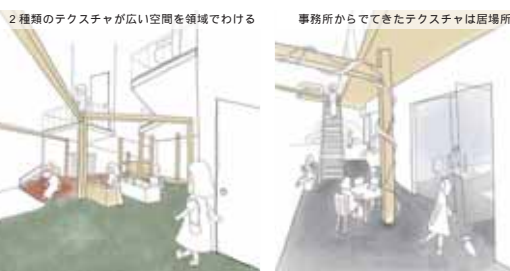


07. [断面図] この街の暮らしを育む家



08. [平面図] 小さな段差と街のテクスチャが暮らしを彩る

小さな段差は地味な空間としてエッジを生む役割を持つ。また街にあるテクスチャを引き延ばすことで、住宅の街への広がりを視覚的に感じられ、空間の所有意識が生まれる。この設計は暮らしの鉢植えのプロトタイプであり、暮らしのサイズが大きくなることと鉢植えが必要となり、この鉢は用途が変化してゆくのを受け入れる。



- 1 ページュのタイル
高層マンションの既存のタイル。階段で改築部分とながり、公共の場としてのテクスチャとなる。
- 2 緑のコンクリート
新しいテクスチャとして向かい同士のシャッター空間に使用し、間の道全体に伸ばす。150mmのレベル差を車が通過できるように、スロープで既存アスファルト道路とつなぐ。
- 3 モルタル
設計事務所の既存モルタルを建物の外まで引き延ばす。150mmのレベル差で常設の家具を屋外に置くことが出来る。
- 4 乱張り石畳
新しいテクスチャを事務所のスタッフ用出入口に使用する。主に事務所の人が使われる。
- 5 正方形の赤タイル
既存住宅のドア部分のテクスチャを、シャッター空間まで広げる。既存であった3段の段差も利用し、階段も居場所として道に開く。
- 6 長方形の赤タイル
既存のガレージのテクスチャを道へ伸ばす。住人の家の領域を広げるとともに、パブリックスペースと近い距離をつくる。

